

飛耳長目〈第20回〉開催概要

日時	令和6年4月10日(水) 午後1時30分～午後3時
場所	skateboard&ECOshop ハカル AZUMINO
テーマ	市民活動を通じたまちづくりについて
参加者	7名(うち TEAMぴかっ人4名)

TEAMぴかっ人の活動について

参加者 できないことを頑張ることが今の社会の流れとなっているが、自分のへこんだところも大切にできる人を私たちは「ぴかっ人」と呼んでいる。自分の得意なことは誰かの役に立ち、苦手なことは誰かの役割になるつながりができるとよい。そのままの自分でいられると、それが自己肯定感の土台となる。できる人ができることをできる時にやるのがTEAMぴかっ人。自分の得意なことを活かすには、まずは自分を知ることが大切。自分を知ることでお互いの違いを認めることができる。活動の中で、自分の好きや得意を表現する「ぴかっ人マルシェ」の開催場所や好きなことを好きな時に好きな場所で学べる「ぴかっ人学園」の拠点となる場所がないこと、活動を多くの人に知ってもらうための資金がないこと、運営スタッフが不足していることに困っている。

参加者 ぴかっ人学園では、高卒認定試験のサポートを行っているほか、不登校支援に力を入れている。現在は、三郷交流学習センターゆりのきで週1回活動している。

参加者 3年前に大阪から移住し、現在は心理カウンセラーとして活動している。TEAMぴかっ人と出会い、形は違っても同じ思いを持っていることに感銘を受け、一緒に活動をしている。まずはこのような場所があることを多くの人に知ってもらいたい。

参加者 自分は高校生だが、不登校でなければ、ぴかっ人学園で1週間の出来事を共有できていなかった。周りの大人たちに感謝している。

参加者 TEAMぴかっ人には、エネルギーを感じる。自分も高校生だが、高校生は大人とつながると自分の人生もこれからの選択も豊かになる。

市長 市では一昨年、年齢や性別、LGBT、国籍、障がいの有無等に関わらず、その人の持つ能力を自由に発揮できるまちづくりを進める「多様性を尊重し合う共生社会づくり条例」ができた。また昨年は、それを具体的に実行する「多様性を尊重し合う共生社会づくり計画」をつくった。市内でも不登校支援を行う施設や皆さんのようにお手伝いをしてくださる方がいる。そういった方々の緩やかな連帯ができ、いろいろな人と話す場や助け合う場があるとよい。

不登校支援について

市 長 現在、ぴかっ人学園を利用している人はどのくらいか。また運営費用はどのようにしているのか。

参加者 まずは、子どもも大人も自由に集まって学んだり遊んだりできる「まなび〜ず」という場所をつくった。ここは30人以上が参加する日もある。別の日に「らふてるコース」という不登校の子のための居場所も開いている。20人くらいの参加があり、会場である三郷交流学習センターの使用料は減免してもらっている。大人も自ら楽しみにして参加している。回数を増やしたり会場が減免にならなかつたりすると、費用が必要になる。

市 長 市内には、不登校支援を有料で行っている団体があるが、それに関してはどうお考えか。

参加者 すでに苦しんでいる子から費用は取りたくない。市民活動のレベルで、そこに行けば誰かいて安心できる場所があるとよい。ぴかっ人学園は子どもが大人とつながり合う場所になればと思っている。保護者の送迎がなくても通いやすい拠点があればよい。

市 長 ぴかっ人学園に通っている子は、車で来ているのか。

参加者 今は、学校帰りに来る子が多い。私は、仕事を終えた大人が集まる夕方からの活動に価値を感じている。例えば、ぴかっ人学園の拠点として空き家を借りたいとなったときに、市の支援があると借りやすい。

市 長 おそらく空き家として斡旋しているのは、大家がいなくていいところだと思う。そのようなところであれば、探すことができるかもしれない。

参加者 中高生への支援が手薄ではないかと感じている。安曇野市は野外保育に力を入れているほか、小規模特例校もあり、小学校まではよい流れができています。しかし、それ以降は普通の中学校になってしまう。

参加者 決められた学校に行くことがすべてではなく、ぴかっ人学園のような小さい拠点がたくさんあれば、そこに通う選択もできる。市が私たちのような市民団体を支援することで、子どもの選択肢は増える。

市 長 そうなると理想的だが、実現にはいつか山を越えなくてはならない。高卒認定試験となると、学力が必要になる。そこをどのように担保するかだと思う。学校に行きたくない理由は人それぞれのため、一人ひとりの話を聞いて対応するしかない。

参加者 子どもには、多くの大人と出会ってほしい。子どもは敏感で、怒られないとわかってから本音を言う。関係づくりには時間がかかり、安心できる場所が必要。

参加者 子どもはいろいろな大人と関わることで、さまざまな考え方や生き方があると知り、悩みから救われる。何かしてあげるのではなく、ただそばにいる大人を増やしたいと思っており、市が協力してくれると嬉しい。

今後の活動と市との連携について

市長 皆さんが困っていることは、場所の確保か、運営するための資金か。具体的であると実現に向けた話ができる。

参加者 ぴかっ人学園は、拠点となる場所の確保をお願いしたい。また、市の職員と一緒に活動できればと思っている。

市長 自分のスキルを活かし、ボランティアに参加して地域の活性化に関わる職員は多い。業務ではなく、皆さんに共感して携わる職員が出てくることはよいこと。緩やかに連帯してできることをしていけるとよい。

参加者 ぴかっ人マルシェでは、場所の確保をお願いできればと思う。今回は屋外で行う予定だが、出店者はテント等を持っておらず雨天の対応が難しい。公民館で開催したこともあるが、屋内では飲食できない。参加者と出店者が食べ物を食べながら、つながりたいという思いがある。私たちと市で目的が重なる部分があれば、一緒にできればよいと思う。

市長 さまざまな団体がマルシェを開いているが、民間の施設でも飲食ができるのは屋外のみ。次回以降は相談しながら進めていけるとよい。屋内で食べ物を売る際はどのようにしているのか。

参加者 屋内では包装した食べ物を売り、飲食できるスペースまで移動してもらっている。今後は安定して持続することを目指しており、市にも認知してほしいと思い、お話しさせてもらった。

市長 少人数で準備することは大変だと思う。市内にもマルシェを行っている団体がいくつかある。市が皆さんと一緒にやるとなると、支援していない団体との違いを明確にすることが難しい。